

二 等 兵 物 語

渡 辺 美 知 夫

二 等 兵 物 語

渡 辺 美 知 夫

昭和二十年五月のある日、私にも召集令状、通称「赤紙」が来た。夕方学校での勤務を了えて帰宅したら、届いていた。妻が玄関に持って出て来て、夕闇の中で開いてみた。粗末なハトロン紙の封筒に入っていた。

赤紙というから、血の色をしているのかと思ったら、思いの外に明るい色であった。内容は五月十六日午後三時旅順駅に出頭せよ。家族縁者の見送り等は一切これを禁止するという趣旨である。隠密裡の出動ということで、行先は勿論記載がない。戦局はすでに日に日に非であって、日本軍の暗号も悉く敵方に解読されている状態らしかったから、今更隠密の秘匿というのは、という気もしたが、駅頭で未練がましく騒ぎ立てられるよりは、とも思った。

それから「応召」までの数日が大変であった。勤め先では大分前からこのことあるを予期して、仕事の引継ぎ、身辺の整理はほど完了していたが、問題はわが家の方である。転勤による引越しとはワケが違うの

で、いっそ事は簡単とも云えるが、さて何をどうしたらよいか、何をしてみても空しい感じであった。その動揺を紛らしてくれるかのように、昼となく夜となく客がある。お別れという名目だが、お蔭でこちらは妻や子と心を籠めて別れの一刻を過ごすことも叶わぬことになった。一番こたえたのは、明日は出発という日の朝から、学生達がそれまでも増して、大挙して押し掛けて来て、御親切にも丙種合格の私に、日頃軍事教練や演習で教わったり体験したりしたことを、思い出し思い出し、逐一伝授してくれようとしたことであった。私は当事者だから席をはずすわけに行かない。妻は彼等の接待にお勝手にはいりつばなし、という有様になった。学生達は大変な思い入れで、日が暮れても帰ろうとしない。彼等がともかくも引揚げたのは、夜も白々と明けそめた頃であった。疲労の極、妻と私とはしばらくまどろんだが、何か肝心なことが仕残されているのではないかという緊張感が、私共を熟

睡させなかつた。応接間のソファーに並んで掛けて、さて一家のこと、妻やまだ幼い男の子、女の子のことなど話し合おうとしても、さてこの期に及んで何をどうすると計画してみたところで、旅順はいわば敵地であり、「内地」はアメリカの潜水艦が出没するという海を距てているので、迷惑通り事が運ぶ見込はずでゼロに近いと思わざるを得なかつた。要するに成行きに委せる外はないな、となつた処へ、壁の時計が八時を指していたのが、何故かハッキリ記憶にあるのだが、学校の私の部屋へ「勤労働員」ということで、旅順高女から派遣されて来ていたK嬢が現われた。それをキッカケにその日もまた客の応対が続くことになつた。

私は不用意といえば不用意のまま、「奉公袋」一つを提げて、ひょっとすると二度と帰れぬかもしれぬわが家を、後にする事になつた。へトへトに疲れて、寝不足で、茫然としていた。

応召兵の面々は、私同様声をあげる元氣もなく、列車に乗り込んだ。この時はスシ詰めではあつたが、まだしも客車のシートに着席することができた。お互い見ず知らずの中年男達が、箱詰めにされて、行先も判

らぬ旅に出ることになつた。運を天に委せる心地であつた。

列車は大連で旅順線から満鉄本線に入り、ところどころで停車しては又発進を続けた。何のための停車か、何のための発進か、説明は勿論一切ない。多分途中の要処々々で応召兵を拾い集めでもしたのである。時が経つにつれて、われわれ兵卒は、段々人間ではなく、モノに転化させられて行くようであつた。

多分奉天（瀋陽）の駅に着いたとき、陸軍の軍人数名が車内に乗込んできて、われわれ応召兵を検分した。その中の一人が私の勤め先の旅順工科大学で、軍事教練の教官を勤めていた、予備役のM中尉であつた。数ヶ月前に動員されたばかりであつた。彼は私と視線が合うと、一瞬ハッとしたりしたようであつたが、やがてその口辺に苦笑の色が浮かんた。私は大学の学生主事として、形式上昨日まで彼の上司であつた。

列車は長い停車のあと、再び発進した。元の本線ではなくなつたようだが、窓にはブラインドが降ろされたので、どっちを向いて、何処を目指しているのか、皆目見当がつかない。かなりの時間走り続けた後、列車が止まると、下車の命令が出た。一夜明けていた。

車内の薄暗がりの中から外に出ると、陽光が眩しかった。午後の日射しであった。プラットフォームも何もないところで、反対側の線路の上へ跳び降りさせられた。そこには有蓋貨車が止まっていて、われわれはそれに詰めこまれた。今度は立ったままである。愈々モノになったという実感が身に沁みた。やがて貨車は動き出し、一同の気分は一段と減入りこんだ。立っているのが堪え切れなくなる者が始めた頃、どうやら目的地に着いたらしい気配になった。傾きかけた日射しを背に受けて暫らく「行軍」し、いよいよ兵舎に着いた。整列させられ、「員数」を数えるため「番号」をかけさせられた。満洲第六八九部隊大和隊に入隊したのであることが告げられた。場所は石頭という処だそうである。兵科は輜重隊だということで、私は突進に「輜重輸卒が兵隊ならば」と始まる、多分日露戦争当時に流行したらしいザレ歌を思い出した。輜重隊とは、大日本帝国陸軍にまともには仲間入りさせて貰えない、荷運び人足の隊だという趣旨である。大和隊とは部隊名であって、それは当然何個かの中隊や小隊から成り、その小隊は又数個の分隊から構成され、自分はそのうちのある分隊の、その又一員になったのである。

分隊長の位は兵長であった。私はそういう兵種があることを、この時初めて知った。上等兵の上の伍長の、その又上にあたるらしかった。兎に角その兵長の分隊長が、全く初対面の筈のわれわれの名前を、全部暗記していたのには驚かされた。私は当時すでに十年余り教師生活を経験していたが、それ迄一度も自分のクラスの学生の名前を全部覚えたりしたことはなかった。これは参ったなと思った。小谷という名のその分隊長に何となく親しみを覚えた。小柄な、実直そうな人物であった。齢は私より十歳は若そうに見えた。

軍服をはじめ細々とした生活用品が配られ、寝床も指定されて、支給品は時折検閲があるから、縫針一本といえども紛失してはならぬと申し渡された。寝床の枕許の小棚に所持品をキチンと整頓し、予備の衣類も所定の寸法通り畳んで積み上げるよう命令された。限られたスペースなので、寸法を守らないと隣近所が迷惑することになっていた。

翌る日から早速「新兵教育」が始まった。教育係は見習士官が二人いたが、一人は三重高等農林出身だと聞いた。長身の美丈夫であった。もう一人は小柄で、赤児のように血色のよい男であったが、いささかオッ

チヨコチヨイで、訓話は専らこの男の受持ちであつた。「要するに」というところを、必ず「要すれば」と言い、この句が余程お気に入りの方で、一席の訓話の中に、不必要に度々この句が出てくるのがおかしかった。上官は分隊長の兵長の外に、軍曹一、上等兵二、一等兵一という構成であつた。二人の上等兵のうち一人が「万年上等兵」という奴で、絶えずわれわれの隙をうかがつては、われわれを苛めた。たしか上林という名であつた。もう一人は逞しい、実務的な男で、手取り足取りわれわれを「教育」してくれた。彼の言つたことで今でも忘れないのは、「仕事はチマチマとやるものではない。思い切り大きく仕事をしろ」という忠告であつた。兎角手許だけの仕事しかりない自分を省みさせられたので、今以てハッキリ覚えていゝるところでわれわれの仕事とは、要するに馬車曳きである。荷車に馬の飼料の乾草を山と積んで、それが荷崩れしないように綱をかける、これが仲々大変であつた。揮身の力をこめて縛つたつもりでも、ガタゴトと曳いて行くうちに大抵荷が弛んで、やり直さねばならなかつた。綱の結び方なども、要領を教わつたあと、早速自分でやってみるのだが、とうとう一人前に

はなれなかつた。そういう中で大いに面目を施したのは、当然のことながら、「地方」で、つまり軍隊にとられる前に、馬車曳きを生業にしていた男であつた。瘦せ型のおとなしそうな男であつた。もう一人は開拓団から来た男で、日常農耕に馬を使い慣れていた。彼等はわれわれに模範を示す役を、毎日教育係から言いつかつて、得意であつた。

われわれの隊にはトラックは一台もなく、荷車は昔ながらに馬が曳いた。こんなことではいざ実戦となつたら、一溜りもあるまいに、と思われたが、勿論二等兵にはどうするわけにも行かなかつた。毎日の最大の仕事は従つて、馬の世話であつた。馬は案外神経質で、臆病であることが、身を以て判つた。軍曹の話では、エサにする木や草の葉の、どれが無毒で、どれが有害かの弁別も、牛にはできるが馬はダメである。特に満洲には到る所にあるニセアカシヤの葉は、決して食べさせてはならぬということであつた。只一度だが、病氣になつた馬を徹夜で看病する軍曹に、夜通し付合わされたこともあつた。日常は夕方になると必ず馬にブラシをかけ、そのあと蹄の掃除をさせられた。馬の腹の下に入つて自分の膝の上に馬の脚をかい込ん

で、鉄のヘラで蹄に詰まった泥を丹念にそぎ落とし、そのあとへ油を塗ってやるのである。脚の数だけそれを繰返すのだが、馬の腹の下で、馬の尻尾の方を向いてしゃがみ込む仕事は、少なくとも初めのうちは度胸が要った。馬にも夫々個性があり、癖があることも、教わりもし、自ら経験もして追々に判って来た。それでも今迄馬など見たことはあっても、さわったこと、ましてや跨ったことなど一度もない連中が殆んどなのだから、時には噛みつかれたり、蹴とばされたりといった事故が起る。仲間の一人がある時、厩の中で立って休んでいる馬に、真うしろから近付いたために、いきなり胸板を蹴とばされた。蹴癖のある馬であった。幸い骨折には至らなかったが、鮮かな馬蹄形の紫色のアザが、その後永いこと彼の胸に残っていた。

輜重隊では馬は曳くもので、殊に兵卒は馬に乗ることなど絶えてないのだそうだが、一応乗馬訓練もすることになって見えて、ある日その訓練があった。オッカナビツクリ馬の背にかき登って、「馬上豊かに」納まったところで、上等兵の一人が薪ザッポウで馬の尻に一撃を喰らわす。馬上のサムライは秒単位で落馬である。教育係はそれが面白くて、一巡するま

ではやめようとしなかった。ところでこの私は、赤紙が来るまでほぼ三年間、馬の稽古をしていたのである。「君のは馬術じゃなくて落馬術だよ」と冷やかされる位よく落ちたが、兎に角馬場での訓練を始めて僅か九回目に、当時の関東軍司令官であったU大將が、関東州大学高等専門学校合同軍事演習の査閲にやってくるというので、その先導役を仰せつかり、見晴らしが良いだろうと司令官を崖ぐま縁に案内して、副官の少佐をハラハラさせたという実績も持っていたのである。その後は当番学生が朝毎に曳いて来てくれる馬に跨がって出勤してもいた。順番が巡ってきて、私が馬に跨がったところを、上等兵殿は思いつ切り「一鞭」入れた。馬は躍り上って駆け出す。私は皆の期待に反して落馬しなかった。反動を抜いて草原を一廻りしてから引返した。爾後私はこの訓練は免除になった。この時は生意気だとぶん殴られる目にも遭わずにすんだ。

ところで「石頭」という処が「満洲国」のどの辺にあるのか、誰も教えてくれなかった。その後もつい調べてみたこともないのだが、どうやら東満に位置するらしい。終戦直前ソ連軍がドツとなだれ込んだとき、

もしわが部隊が依然としてそこに駐屯していたら、私も最初にして恐らく最後の白兵戦に捲きこまれざるを得なかった筈だと思ふ。後で判ったことだが、旅順工大で司計課長という仕事をしていたAさんは、私と同じ日にやはり東満のどこかに遣られて、ソ連軍との戦闘で戦死したことになる。これと同じ時期に、こちらは北満に連れて行かれた、同僚のTさんもIさんも、遂に還らなかつた。

石頭での日常生活は、朝起きて最初の仕事はいきなり早駆けで、二百米ぐらい先の厩舎に駆けつけて、馬の寝薬を腕一杯にかかえ込んで舎外の日向に持ち出し、地面に拡げることである。それから藁屑や馬糞だらけのまま、又もや早駆けで兵舎に戻り、当番兵は朝食の配給を受けに行き、分隊内では食器の準備をする。その食器はかねて聞いていた通り、アルミニウムの碗と箸で、「金の茶碗に金の箸、仏さまでもあるまいに」という歌の通りであつた。当番兵は炊事場から、炊事軍曹の機嫌を損じないように気配りしながら、大型バケツに分隊の員数分だけ纏めて入れられた飯を提げて帰って、自分の裁量で員数分の碗に盛り分ける。計量器があつて、目方を計つて分配するわけではない

から、多少の多い少ないが生じるのは已むを得ない。ところで三十才を越した新米二等兵達は、連日早朝から日が暮れるまで、間食もなしに慣れない重労働をさせられるので、腹がへって仕方がない。従つて三度のメシが何よりの楽しみなので、その量の多少は大問題であつた。みんな真剣な眼付きで炊事当番の手許を見据えたものである。朝食騒ぎの終つた直後のほんの東の間に、われわれは手早く手を洗い、歯ブラシを使った。それにつけ軍隊という処は、清潔をむやみにやましく云う不潔な処、衛生をむやみにやましく云う不衛生な処だな、と思わせられた。

そんな日々を重ねるうちに、私に何度目かの厩当番がまわつて来た。毎朝駆けつける厩舎で、乾燥させるために外に出して拡げておいた寝薬を、又元に戻して馬の寝床をしつらえてやつたり、飼料の準備をしたり、馬の健康状態を見て廻つたり、仕事はいろいろあつて休む暇もない。その日も私は所定の仕事を一通り終つたので、交代時間までに床掃除をすましておこつた。箒と塵取りを持ち出して厩舎の広い庭を掃きにかかつた。余念なく箒を動かしていると、フト背後に人の気配を感じた。振り返ると例の「万年上等兵」が物陰

からこちらを窺っている。私はギョッととして直立姿勢をとり、「渡辺二等兵厩当番中異状ありません」と、教わった通りの申告をした。彼は陰鬱な顔付きでジロリと私を睨んだが、幸いなにも言わずに音もなく遠ざかって行った。私は何か難癖をつけられるかと思つたのに、何事も起らなかったのでフト気が弛んだ。私は元通り床の掃除を続けた。塵取りには馬糞や藁屑がたまつた。私の作業は無意識の動作になつて行った。やがて私の眼の前に直径一米余りの井戸が現われた。井戸枠も蓋もない、只の穴であつた。その井戸がそこにあることは以前から知らされていた。その時も前方に井戸があるのは判つていた。それなのに私の足は機械的に前に進み、物理的必然として私はその穴に落ちた。塵取りと箒は持ったままであつた。一物も紛失してはならぬという言い付けによるものであつたかも知れない。私は足から真一文字に落下し、ポチャンと音を立てて水に漬かつた。足は水底には届かなかつた。私は海辺に近い処で育つたので、小学校低学年で泳ぎを覚え、その後も夏休みには午前と午後と二回宛泳ぎに行つた。従つて長時間泳ぐことには慣れていた。井戸の深さは満洲の井戸の常として、かなり深かつた。

水面から上を見上げると、井戸の上端が満月位い的大眼睛に見えた。そこから下は真暗である。私は井戸側をなでてみた。足掛かりになる鉄の錠^{かすがい}が指に触れた。助かつたと思つた。不思議なのは水温の記憶が全くないことである。相当冷たかつた筈なのに、と思ふ。兎に角私はゆっくり井戸側をよじ登つて、無事地表に出た。当番の残り時間はまだ相当あり、私はズブ濡れのまま掃除を続け、やがて来た次の当番と交代して、営舎に帰つた。

「渡辺二等兵厩当番終つて只今帰りました。勤務中井戸に落ちました。」部屋の入口に直立して、私は小谷兵長殿にそう報告した。兵長は跳び上つて驚いた。

「何故それを先に言わんか！」怒鳴つた兵長の声を、私は今でも生々しく思い起こすことができる。

「下着から上着まで全部脱がせる。」分隊長はほかの兵達に命令した。私は忽ち素ッ裸にされて、乾いた衣類一式に着替えさせられた。

「渡辺二等兵は午後の作業に出んでよし。床に入つて休め。」

私はお蔭で半日久しぶりでノンビリさせて貰つた。モノになつたと観念していた二等兵が、この時ばかり

は元の人間に還った心地であった。

私は幸い分隊長の温情に護られていたが、隣の分隊ではそうは行かなかつた。バラック建ての兵舎だから隣の部屋の声や物音は筒抜けになる。実は隣の分隊に同僚の物理の先生のFさんがいたのである。彼は若い時脊椎カリエスを患ったことがあつて、重い物を担いだり、激しい労働はできない軀であつた。それが毎日耐えられる以上の労役を課せられるので、夕食のあと決まつて罵声の的になつた。私にはそれがFさんと判つてからは、身の細る思ひであつた。只怒鳴られるだけでは済まず、日本陸軍名物の三八式歩兵銃という奴を水平に捧げ持たされて、苛められているらしい気配で、身替りに立つわけにも行かず、辛かつた。「鶯の谷渡り」をやらされないのでまだしもでも思うより仕方がなかつた。谷渡りとは部屋の中央の長テーブルの下を、銃を持ったまま潜らされることを云うのである。帰還してから判つたことだが、七月も末頃に小谷兵長が旅順に現われて、わざわざ私の留守宅を見舞つてくれ、妻は急遽Fさん宅に電話して奥さん呼び、一緒に兵長から夫達が「元気で」勤めている旨の話を聞いたそうである。この兵長は終戦後部隊と行動を共

にしたらしいのだが、何処にどうしているのであらうか。

われわれが石頭に到着して丁度一ヶ月目に、わが六八九部隊は石頭を引払つて、それこそ一物をも残さず引払つて、安東に移動した。その移動が告げられた夜、入隊以来初めて、例の貧しい食事のあと、飯盒の中蓋の底がわずかに濡れる程度の酒が振舞われ、無礼講とあつて各々隠し芸を披露せよという命令が出た。今と違つて当時の中年者には、そう云われてもオイヤとそれに応じる気軽さなどある筈もなく、何とも盛り上らぬ雰囲気の中、私にも順番が廻つて来た。私は思い切つて先ず「ジョスランの子守唄」を声張り上げて歌つた。すると意外なことに、もう一曲と声がかかり、仕方がないので今度は「ソルベীগの歌」を歌つた。今迄日本の民謡などばかりが聞こえていた中で、これは何とも場違いな風景であつたと、私は今も思うし、あとで誰かが私をブン殴りに来るかと、実は覚悟していた。私は別に反抗心からそんな真似をしたわけではなくて、その当時の愛唱歌を只そのまま歌つてみたただけのことであつた。ところが「宴」果てたあと、若い将校や下士官が私のそばに寄つて来て、有難う、

身に沁みたなどと言われたのは、何とも照れくさく、意外で、恐縮した。

この頃隊内に沖繩が陥ちたとか、陥ちそうだとかいう噂があり、実はわが部隊も沖繩にやられる筈だったのだという話もあって、「助かった」と大声を出す者も出たが、今次の移動が何故安東なのかは、例によっても判らなかつた。

安東とは中国と朝鮮の国境をほぼ東西に流れる大河の、中国側の河口にある街である。朝鮮側の河口の街は新義洲という。安東ではバラック建ての兵舎もなく、公園らしいたがずまいの、緩い傾斜地の樹立ちの中に、テントを張って宿営した。ここでの仕事は鴨緑江の河岸の波止場から、馬の飼料になる高粱コウリヤンを馬車に積んで、幕舎まで運ぶという、只それだけのことであった。高粱が詰められた麻袋マイタイは、一つが八十キロあった。これは弱腰の新米兵にはオイソレとは担げない。なんとか担げるように要領を覚えさせられたが、これに数日はかかった。その要領の中には、袋に穴をあけて中味をこぼすという手も勿論あったが、これは見付かると「眼鏡はぜせ！」ということになる、隠密を要する仕事であった。「メガネはぜせ」のあとはビンタ

が飛んでくるのである。隣の分隊のFさんはこの労役にも閉口した。気の毒であった。石頭の乾草の束よりは、麻袋の方が処理はまだしも簡単であったが、今度は重さがこたえた。前にも言ったように、われわれ新兵は年中腹をすかしていた。こぼれた高粱をついしばむ者も出た。これが見付かると、これ又面倒なことになる。

「キサマのような奴は一銭五厘でどうにでもなるが、お馬さまはそうはいかんのじゃ。その大事な、大事なお馬さまの上前をはねるとは何事か」そのあとは又ビンタである。往復することもある。よくもこう何事につけひとの横面がはれるものだと思えるほどであった。しかし何しろ空き腹を抱えての重労働つづきなので、時には体力が尽き果てる時もある。そういう時はワザとヘマをやって、一発かまして貰うと、シャキッとして暫くは保った。私もときどきこの手を使った。井戸にはまった一件でも判るように、疲労の極体力の限界に達すると、肉体と意識とがいわば剝離してしまふ、思考能力が消えてしまうのだ。日本陸軍の方針は、兵に思考能力を持たせないように仕向けることだったのだと、改めて思わせられたのは、終戦後引揚

げて来て、実に久しぶりに神田の古本屋街に行ってみた時であった。店頭にペーパーバックの大型小型とどりの、欧米の文学作品が山積みになっていた。それらはアメリカの軍当局が、前線の将兵に配布したものだということであった。私は今でも大型本ではシェイクスピアの一冊本の全集、小さいものではワーズワース、シェレー、キーツ、テニソン、ブラウニングなどの袖珍版詩集などを、記念に大事にとって置いてゐる。

安東では上記の通り、お手のものの馬車を使った高梁運びに明け暮れた。銃の操作など一度もやらされたことはなかった。「輜重輸卒が輜重兵になっても、本当は俺達サムライではないんだよな」と自嘲する者もいたが、考えようではないんだよな」と結構な御身分であった。そこへある日突然「外出」の許可が出た。許可といても「オレは外出などしたくない。隊内で寝てる方がいい」というわけには参らぬ。とにかく外出しなければならぬ。地図一枚持たされているわけではないから、安東の街のどこに何があるのか皆目判らない。私は偶々同じ分隊に所属することになった応用化学科のM助教授と連れ立って街に出たが、只漫然と通

りを歩くより外に能がなかった。そこへ新聞紙が一枚風に乗ってフワフワと飛んできた。私は反射的にそれを引摺み、路傍にしゃがみ込んで読み出した。同輩ものぞき込んできた。私共は記事を片っ端から読んだ。内容などどうでもよかった。活字を読む、只それだけで嬉しかった。「活字中毒だね」私はMさんに言った。さてそれも忽ちのうちに仕終わった。次はどうしようということになったが、Mさんが咽喉が乾いたというので、その辺に行儀よく並んでいた平屋で赤煉瓦の、どうやら満鉄の社員住宅らしい一軒に、闇雲に案内を乞うた。玄関に初々しい若妻が現われた。事情を告げて式台に腰かけてお茶の御馳走にあずかった。あんなおいしいお茶は飲んだことがないなど、今でも時折思い出す。そしてあの若奥さんはその後どうしたろうかという思う。私共の只一度の外出は他愛もなくそれで終った。

帰隊してみると初めての郵便物が届いていた。私宛はかなり部厚い封書である。差出人は旅順の電気科の学生のSであった。内容は学生主事室に配属されて来ていた、前記のK嬢に対する、彼の恋心の綿々たる開陳であり、帰ったら結婚の世話をしてほしいという懇

願であった。兩人のことは応召前すでに私は知らされていて、K嬢の母親を呼んで意向を確かめるところまで行っていたのではあったが、一兵卒の身の上の今となっては、それどころではなかった。返事を書く気にもなれなかった。第一軍隊という処は、その種の返事が書ける雰囲気ではなかった。こっちの身にもなってくれよ、と言いたい気持であった。しかしそんな内容の手紙が、一兵卒の許に無事に届いたということ自体は、チョット面白いなと思った。この兩人を私は大連での抑留生活のドサクサの中で、ともかくも仲人を勤めて結婚させることになるのだが、それはずっと後の話になる。

安東に来て間もなくのことである。私の身の上にチョットした変化が起きた。ある日突然私は中隊長の従卒に配置替えになったのである。日々の労役の成績がサッパリ上らなかつたせいかもしれない。私は傾斜地の私の分隊の天幕から、丘の上の中隊長の幕舎に通勤することになった。下士官の命令のままに、書類の整理をしたり、考課表というものの記入を手伝ったり、中隊幹部の将校や下士官の会食の給仕役をしたりで、力仕事からは解放されたが、手持ち無沙汰になったわ

けではなくて、お偉方の雑用を足すのに走り廻らされた。この間私は大変な恥をかい、とんだ勉強をさせられることになる。従卒になりたてのある日、中隊長殿の昼食を軍曹がしつらえて、膳の上に並べたのを、何の気なくそのまま両手で捧げ持って、中隊長のところへ持って行こうとした。すると件の軍曹が「オイ、キサマそれをそのまま中隊長殿のところへ持って行くつもりか」と怒鳴る。私は何か外に持って行くものもあるのかと、キョロキョロした。「キサマ、縦膳、横膳ということも知らんのか」と軍曹は意地が悪い。

「今キサマが持つてる膳は縦膳ではないか。キサマ中隊長殿を切腹させる積りか」と来た。私は膳というものは柁目を横にしておくのが、日常の作法だということとを、全く知らなかつた。軍曹はワザと縦膳にして、私を試したのである。何事によらず素直には教えて貰えないのが軍隊なのだなど、情なかつた。私の幼少時代にはわが家でも銘々膳を使っていたのだが、当時は誰も膳に関する作法など教えてくれなかつた。青年期以後はチャブ台になり、テーブルになって、お膳のことなど忘れてしまった。お蔭で私は一つ賢こくなつたわけだが、軍隊ではこういう意地悪さが、夜となく昼

となく横行する。男世帯だからサッパリしているだろうとは、とんだ見当違いで、世にいう嫁姑のいがみ合いそのけの、陰湿な葛藤が渦巻いているのが実態なのである。戦前の日本男児は通例二年間兵隊にとられて、こういう心理的暗闘をタツプリと体験させられたお蔭で、人情の機微も人並には判る、一人前の男になったわけなのであろう。

将校、下士官の食事の世話をするようになって、恥もかいたが余徳もなかったわけではない。われわれ二等兵は、度々言う通り、年中腹をへらしていたが、将校や下士官は随分食べ残すことを、私はすぐさま発見した。今どきの若者に残飯を食えなどと言おうものなら、それこそハリ倒されるであろうが、当時は事情が違った。私は将校、下士官が食事毎に残すものを、一応はバケツに乗せた形にして、あとでソツと幾つかの握飯にして取って置くことにした。夜私が自分の天幕に帰る頃になると、中隊長の暮舎の傍の繁みへ、何人かの「戦友」が、ソツと忍んでくる。私は手早く作り置き握飯を彼等に渡した。暗闇の中だから相手が誰だかは判らない。どうも忍んで来たのは私の分隊の者だけではなかったようである。私が現在もつき合っ

いる只一人の戦友のM君が、数年前はるばる名古屋から、夫妻で訪ねてくれたときの思出話にも、このことが出て懐しかったが、M君も私の分隊の一員ではなかった。

又こんなこともあった。安東の天幕生活もどうやら慣れた頃、中隊長が転宅するから手伝えという分隊命令が出て、二等兵達はゾロゾロと街なかの中隊長宅へ出張した。私は中隊長が普通の民家に住んでいるとはつい思わなかったので驚いたが、思えば当り前のことかもしれない。とにかくタダ働きの人手がウンとあることなので、引越しは瞬くまに終わったが、兵長殿が後始末にあたりを見廻わして、畑のものはどうするのかと言いつ出した。お伺いを立てたところ、全部移せとのことである。肥料を入れた土まで掘り起こして運んだ。私は石頭での徹底した立退きぶりを思い出して感嘆したものである。

よそ目にはなんとも他愛のない一日一日が、こうして過ぎて行くうちに、昭和二十年八月十五日になった。この日は昼前から何となく将校や下士官の動きが慌しくなった。昼過ぎには何人かが馬を飛ばして、どこかへ駈け出して行った。部隊全体が動揺したが、下

ッパのわれわれには何事が起こったのか、サッパリ掴めない。そのうちに私は中隊長に呼びつけられた。

「渡辺二等兵、これを読め」中隊長は一枚の奉書大の紙を私に差しつけた。受取ってみると「詔書」であった。戦争終結を宣する勅語である。

「声を出して読め」中隊長はそう命じた。ハハン、中隊長はこれから部隊を集合させて、これを読むつもりだな、そう思った途端、これはえらいことになった、と私は思った。むかし信州かどこかの中学で、校長が教育勅語を読み違えた責を負うて自決した、という話を聞いた覚えがあったからである。しかし中隊長が読めと命じたからには、いやでありますと言う訳には行かない。軍隊とはそういう処なのである。この詔書は戦争を終らせるための宣言文である。読み違えをしたからといって、跡を引くことは万々あるまい。自分が読み違えたところを、中隊長もその通り読み違えたとした処で、隊員は誰一人原文の写しを手にしているわけではない。ここは一番度胸をきめるか、私は突嗟にそう決心した。「中隊長ずるいぞ」とまではその時は思わなかった。私が兎に角朗読し終ると、中隊長は「よし」と言い、詔書を取返して自分でもゆっくり

黙読し、むつかしい漢字をあちこち発音の念を押した。漢和辞典が手許にあるわけではないから、私にしてみても当てずっぽうなのだが、私は断乎として返答した。

翌日中隊長はまず私の属する小隊を集合させた。全中隊を集める場所がないとのことであった。小隊の指揮はもとより小隊長がとるのだが、どうした訳か私も隊の最右翼に出て、「中隊長殿に、カシラー右」と号令をかけさせられた。何故そんなことまで覚えているかというと、後で下士官の一人から「キサマの敬礼はまるで中隊長みたいだったぞ」と冷やかされたからである。拳手の仕方にも、将校、下士官、兵、それぞれ型があることを、その後の観察で私もあらためて確認した。

戦争は終わった。そこで久しぶりに散髪でもするかと、誰かが思い付いたと見えて、どこからかバリカンが持ち出され、二等兵達はめいめい刈りっこをするようになった。私はよその分隊のUという人の頭を刈ることになったが、実は私はそのときまで、バリカンというものを使ったことがなかった。U君は心細そうな顔をしたが、誰かと代るわけにも行かぬまま、私が刈

りはじめた。「日本は一体これからどうなるのかね」
刈りながら私はU君に問いかけた。U君は明るい声
で、自信に充ちて「なに、日本はこれからだよ」と答
えた。後に大連に出て、偶然彼にめぐり遇つて判つた
ことだが、彼は京大法学部の出身で、チャキチャキの
共産党員であった。中国共産党政府に対して、すでに
影響力を持っているらしい様子であった。彼がそう返
答して、私を些かビククリさせた直後、バリカンが髪
にひっかかつて、動かなくなつてしまつた。U君の頭
はまだ半刈りであった。私はバリカンを解体する知恵
も働かず、なんとも申訳ないと謝るばかりであつた。
U君はそのまま移動して、別の誰かに事を収めてもら
つたらしかつた。

その後四、五日の間、私は折角書きためた考課表そ
の他の書類を、焼却する仕事に思ひの外の時間を食わ
れた。とんだ賽の河原だなど、私はつぶやいた。今日
まで丁度三ヶ月の軍隊生活も、所詮は賽の河原だつた
など、泌々思つた。何千何百という家庭を引裂いて、
われわれを引出しておきながら、ここ三ヶ月の間にし
たことといえば、旧式の荷車でその荷車を曳く役のは
馬のエサを運んだだけ、只それだけであつたのではな

いか。一体全体これに何の意味があつたというのか。
いくさに負けてひまが出来たせいで、そんなことをし
きりに思いながら、紙類を燃やし続けたある夜、多分
十七日か十八日の夜だつたと思う。天幕に今迄見たこ
ともなかつた、曹長の位の男が突然現われて、いきな
り腰の長刀を引抜くと、赤城の山の忠治よろしく、そ
の大刀を振りかざして怒鳴りはじめた。戦いはこれか
らだというのである。「われわれはこれから、国境地
帯の山中に籠つて、徹底的に抗戦しなければならん
だ。キサマら一人残らずしょつ引いて行くから、そう
思え」ということである。困つたなとみんな思つた。
戦いすんで日は暮れて、折角ひとがホツとしてゐるの
にというのが、みんなの表情であつた。あした呼びに
来るからなと、捨てゼリフを残して、曹長は去つた。
そして翌朝、その曹長が姿をくりました旨を、われわ
れは知らされた。脱走第一号である。彼は口で一席弁
じて行つたのとは別の手本を、われわれに示したこと
になる。成程あれが彼の陽動作戦だつたのだな、私は
漸く気が付いた。下手の思案はいつも後からである。

かくて八月二十一日になつた。心待ちにしていた指
令が出た。明日除隊だというのだ。思えばこれとて無

責任極まる話で、爾今足手纏いにつき、退散せよということに外ならない。しかし当座はみんなそうは思わず、相好を崩した。浮々した。ところがである。私一人だけが見習士官に、ソツと天幕の外に呼び出された。私の分隊では私だけ帰さない、というのである。理由は幹部候補生の志願をしているからだそうである。その出願は入隊早々分隊長から否応なしに書類に記入させられた、というのがこちらの気持だが、今更そんなことを愚痴ってみてもはじまらない。これは死ぬなど私は思ったが、只ハイと答えた。どうなとなれという気分であった。美丈夫の見習士官はこの事は明日まで他言無用と言い加えた。明日はみんな帰ってしまうのである。私は流石に心が晴れなかった。みんなが帰り支度で立ち騒いでいる中に入って行く気にもなれなくて、只独り繁みの中をさまよっていた。外の連中は私の様子を怪しむ心のゆとりもなかったようである。そしてその日も暮れた。夜も更けてから、私は中隊長の幕舎を出て、私の分隊の天幕に帰り、自分の寝床にもぐり込んだ。仲々寝つかれない。暫くすると誰かが床脇に忍び寄って来た。大連市役所の吏員だと云っていた後藤という男であった。彼は声をひそめて言

った。「昼間キミは見習士官に呼び出されたようだが、何用だったのか、教えてくれ」私は答えた。「それは君達とは関係ないことだ。関係がないんだから安心して寝ろ」彼は暫く黙ったが、やゝあつて「どうも気になって仕様がなから、打明けてくれ。実はオレはMさんに頼まれて聞きにきてるんだ。このままでは帰れない」「それはオレの知ったことじゃない」「そう言わんと、打明けてくれ」「しつこいな。明日までは他言するなといわれてるんだ。帰れ」「帰るわけにはいかん」私は思わず相手の頭をポカリとやった。彼は漸く諦めたか、スゴスゴ引退った。ところが一時間ほど経つと再び現われた。「キミはさつき明日までとは言つたな。もう明日になつたぞと、Mさんが言つてる」成程零時を過ぎれば明日か。私は「Mさんと呼んでこい」と言つた。彼は渋々呼びに行き、Mさんが擦り寄つて来た。私は「表へ出よう」とMさんに言つた。ケソカをする積りではなかった。狭い天幕の中では、みんなが迷惑してると思った。われわれは天幕の外へ出た。月が皎々と照っていた。満月かと思われた。どうした訳か露がしとどであった。私は五、六歩天幕から離れて、Mさんに言つた。「成程キミの言う通り、ア

シタになつたね。じゃあ言つてやる。キミ達は明日帰れる。ボクだけ残る。それだけのことだよ」月の光を浴びて、Mさんが白い歯をむき出した。いかにも嬉しそうであつた。人間追ひ詰められると、こんなことになるのか、それがその時の私の心況であつた。後藤もMも憎いと思つたわけではない。ホトホト情なかつただけである。

あくる日になつた。八月二十二日である。みんな浮足立っている。私は今度こそ手持無沙汰になつた。どこにいてよいか判らなかつた。ところがである。そこへ例の見習士官がとんで来て「渡辺二等兵、キサマも帰れ。すぐ支度しろ」と言う。「実はよその分隊で病人が出て、入院させたから、員数合わせだ。早くしろ」私は呆氣にとられたが、言われた通りにするしかない。支度をすると云つたつて、別に荷物があるわけではない。軍隊の土産は軍足片方に米を一杯詰めた、只それだけであつた。道中苦勞をするだろうという、せめてもの親心であつたのであろう。

私達は一応隊伍を組んで、只棒杭を立てただけの、申訳ばかりの門衛所に差しかかつた。そこには衛兵が立っていた。それが今名古屋で繁盛しているM君であ

つた。彼は私と分隊は違つていたが、同志社の英文科出身ということで、同じく英文科出の英語教師が、「敵性語」騒ぎのあおりで学生主事に転向させられた私と、ウマが合つたので親しくなつていたのである。M君は流石に寂しそつたであつた。私は彼と文字通り束の間の別れをした。そして一旦衛門を出ると、あとは銘々自由行動ということになつた。M君はその後部隊と共に奉天（瀋陽）に向つて行軍したのだそうだが、途中で下士官達にそれとなく促されて、脱走したのである。M君と私もし立場を換えていたら、私には脱走する勇氣などとても無かつたであらうし、かりに脱走したとしても、M君のように遅しく、何回か襲われたという物盗りをはぐらかすことなど、とても出来たとは思えない。彼の話では持ちあわせた金品を、少しづつばら撒いて「敵」の足取りを鈍らせて、急場を逃れたのだそうである。

私達は先ず鉄道線路を目指した。列車が動いているものかどうか、何も判らなかつたが、安東から旅順まで歩いて帰る気にはなれなかつた。線路に出ると、幸運にも無蓋貨車が動くという。われわれは我先にそれに飛び乗つた。応用化学科のMさんも一緒だつた。道

中みんなは土地の農民が売りにくる瓜や芋などを生のまま貧り噛った。羨しかったが、胃腸に自信のない私はその真似ができず、空腹を抱えたまま辛抱した。貨車はガタゴトと走る。そのうちに草疲れが出て、私は眠り込んでしまったので、何処をどう走ったものやら判らないまま、とにかく気が付いたら貨車が停まっていた。大石橋だという。するとMさんが、大石橋といえば元旅順高校の化学の教授だった人が、この会社の社長になっている筈だから、訪ねてみようじゃないかと、耳打ちした。夜は貨車が動く見込はなさそうだったので、二人で出掛けることにした。Mさんが首尾よく社長宅を探しあてた。松原というその社長は、私も旅順で面識のあった人であった。私共の事情を聞いて、松原さんは大変同情してくれ、心からもてなしてくれた。われわれは三ヶ月ぶりに、時間で追い立てられることなしに、のんびり一風呂浴びさせて貰った。酒が出、肴が並んだ。なんとも思いがけぬ幸運であった。酒に弱い私は、勝手にぐっすり寝込んでしまった。結構な夜具であった。今想い出すと夢のようで、ウソみたいという心地である。

翌朝二人はまた駅に行き、当てずっぽうに貨車を拾

った。余念なく旅順を目指している。これは渡り鳥の帰巢本能のようなものであった。本能的に南へ南へと志した。途中肝を冷やしたのは、中共軍の乗った列車が、こちらに向ってくるぞという連絡が、前方からあった時である。貨車が停まったので私達は慌てて跳び降りて線路脇の林の中へ逃げ込んだ。中共兵の乗った対向車は擦れ違いざま機銃掃射を仕掛けてきたが、幸い一人の怪我人も出さずに済んだ。これでタマの下を潜る経験も一度はしたことになった。

途中どこかで貨車を乗り換えたと見える。というのは大連に着いた時われわれの乗っていたのは無蓋ではなく、有蓋貨車であった記憶があるからである。操車場のような広い処に走りこんで、列車はそこで停まった。夜の九時頃であった。さてこれからどうしたものかと思案していると、鋭い女の悲鳴が遠くに聞こえた。恐らくロシヤ兵が女を掠って行ったのであろう。先が思いやられた。私は取敢えず旅順工大で身許保証人を引受けたことのある、A君のところへ行ってみることにした。幸い彼の家は無事であった。夜が更けていたが、一夜の宿を乞うた。軍足の米はそこで渡した。手ブラになった。あした歩いて旅順に帰ると私が

言うと、A君がとめた。道中が危険だという。さりとてこのままA君のところに居候をきめこむわけにもいかない。翌朝私は大連駅へ様子を探りに行ってみた。

旅順が要塞地帯であるためか、旅順線は完全にソ連軍に抑えられているらしかった。今度こそ歩く外ないなと思った。その時フト気付いたのは、真黒な機関車をソ連兵がセッセと塗り替えているのである。真赤に塗ったのもある。黄色のものもある。白もある。私は新鮮な感じがし、美しいなと思った。機関車といえば、黒と相場が決まっていると、それまで私は思い込んでいた。それがこうも鮮やかな色に塗られてみると、思い込みの訂正、発想の転換を迫られている気がした。

私は引返してA君に、明日歩き出そうと思うと言った。A君は「もう少し様子を見ましよう」と言う。私には街は思ったより静かなように思われた。私は思い切って二十七日朝八時にA君の家を出立した。大連旅順間は四十キロある。チャンとしたバス道路が走っている。今迄歩いたことは一度もなかったが、勝手は判っていた。私はひたすら歩いた。道々物騒な目にも遭わなかった。只一度ソ連兵の乗った、アメリカ製のジープらしいのと擦れ違ったが、別に狙撃もされなかつ

た。昼下り海辺に近いところに差しかけたので、砂浜でしばらくまどろんだ。そして夕方五時頃やっと旅順のわが家に辿りついた。軍帽の星形徽章や服の襟章などをはぎ取った、よれよれの軍服姿であった。尾羽打枯らして古里へ、という心境であった。わが家の門の前に立った途端、中から妻が駆け出して来た。私は一瞬私の帰還が何らかの方法で、家に知らされていたのかと思った。そうではなかった。妻は終戦後毎日暮れには旅順工科大学の学生寮に、「避難」することになっているのだと言う。家の中には六才の男の子と四才の女の子がいて、学生が二人留守番に来てくれていた。私は学生達には寮に帰って貰い、世の常の父親に戻った。ここはもう安住の地ではなくなったのだということがズシンと胸にこたえた。佻しい思いであった。

二等兵は廃業になったけれど、舞い戻った旅順は今や正に「敵地」であった。遅かれ早かれ立退かねばならぬ運命にあった。満鉄線に沿ってドッと南下して来たソ連の戦車隊が、大連旅順地区に大挙して入り込んでいるらしく、いつ踏み込まれるか判らないという状況であった。自分と自分の家族を、自力で護らねばな

らないらしいとは思うのだが、キメ手はなかった。

一方勤め先の大学も、今のところ消滅したわけではない。私は取敢えず出勤した。大学はソ連当局がやがて接収に来るであろうから、それに備えてキチンと整頓しておこうということになっていた。妙なことに中国が接収するとは誰も思わなかった。思えば不思議なこととも言えるが、旅順大連地区は元ロシアの要塞地帯であったことが、われわれの脳裏にこびり付いていたのもあろうか。兎に角われわれは公的には、大石内蔵助の城明け渡しにも似た心境であった。私的には妻は応用化学科の学生が作って来てくれた、ガラス管に密封した青酸カリを隠し持ち、断髪して、男物の服を着込んで暮らすことになった。それから一体いつ引揚船が来るかが、みんなの最大の関心事になる。しかしどれもこれも、確かな根拠があつてのことではなかった。何につけ明確な指令は一切出さずに、噂を流すことによつて、表面上われわれ日本人自身が、自発的に行動するという形で、事態を動かして行く、それがソ連の遣り口であった。われわれはこれからジリジリと追い詰められて行くことになる。

そういう状況の中では、人は段々地金をムキ出しに

するようになる。ソーシャル・ステータスとは別の、本音が丸出しになる。私がこの頃アツと言われたのは同僚の一人が、官給品の家財道具を、中国人に纏めて売り払ったと聞いた時である。われわれ植民地に勤める、今で云う国家公務員には、官舎が与えられた上に、戸棚や椅子、ソーファーやテーブル、それに窓にかけるカーテンまでもが備品になつていて、自費で買い整える必要がなかった。従つてそれらを売り払うなどということは、私などには到底思い構けないことなのであつた。大した生命力だ、こういう「非常時」にはこうでなくては、と私は感服したが、自分ではこれに倣う才覚はないな、と思わせられた。そういえば応召の数週間前には、日頃毎日のように出入りしていた中国人の御用聞きが、その日は唐突に妻に向つて、「旦那のモーニングを売らないか」と持ちかけたという。何故そんなことを言うのと尋ねたところ、その返答が揮つていた。「日本はいずれ負ける。そうすればソ連が入城してくる。その時モーニングを着て出迎えるのだ」という御挨拶であつたというのだ。われわれ落目になつた日本人をからかう積りの冗談であつたのか、それとも本気でそうする気であつたのか、私は未

だに何れとも判断しかねている。前に記したように、大学でもソ連の正式の接収があるものと思つて、準備万端整えていたのだが、これも現実はず想外の呆気なさで終つた。つまり正式の接収など一切なかったのである。ある日一群のソ連兵が乗込んで来て、化学教室で棚のアルコールを見付けると、いきなりキューツと飲み干した上、ツルハシを揮つて実験室をメチャメチャに壊して行つたというのだ。現実はこの節は綺麗ごとでは済まなくなつたのだな、と思わせられた。

そのうちに私の家にも、ソ連兵の招かれざる客が、チョコチョコ押掛けて来るようになった。ラジオ、蓄音器、レコードなどが、真先に持ち去られた。次はベッドであつた。二階から折畳み式のベッド二台を、小脇に抱えて梯子段をトントンと降りて来たのには恐れ入つた。柳行李の類も軽々と担いで行つた。体力の差をマザマザと見せつけられた。押入れの茶箱の中から、妻の衣裳がゴッソリ持ち去られた日もあつた。

中には坐りこんで酒を要求する連中も勿論いる。これが一番始末が悪かつた。飲むと彼等は人柄が一変するのである。彼等はコーヒーは好みでなく、紅茶を欲しがつた。そういえば私の付き合つた白系ロシア人の

家には必ず、立派なサモワールがあつたな、と思ひ當つた。私にはロシア語の心得は全くなかつたが、片言の英語の判るのもいて、話がはずむこともあつて、これは正直迷惑至極であつた。そんな折ふしに判つて来たことは、彼等が中国人を軽く見ていて、われわれ日本人には意外なほど親近感を持つていらつたことであつた。ある日の客は言つた。

「北の方から南下して来る途中で、日本軍の倉庫を幾つも開けてみたが、その中の多くに将校用らしいワイシャツが一杯詰まっていた。一度着たら棄てることにしても、四、五年は保ちそうな程の分量だつた。これほど潤沢にモノを持つて、どうして日本軍は負けたのかね」私は答えた。

「そんなものを、それほど貯め込んでいながら、鉄砲は相変わらず三八式歩兵銃だつたせいだろう」

別の客は又言つた。

「日本の子供は賢いね。街を走る自動車の車種を片端から言い当てる。ロシアではとてもこうは行かない」舌を巻いて感心している。日本は教育が行届いてると、先方からいろいろ例をあげて褒めてくれるのである。

「ところで、お前の書棚に並んでる本は、あれは何語か」と聞く者もいた。「英語だ」と答えると、「ドイツ語の本はないか」と訊く。私はうっかり「少しはある」と答えそうになったが、それより先に相手が「ドイツは敵だから、ドイツ語の本は処分する。イギリスは味方だからいいんだ」と解説してくれたので、やれやれと思った。「正直は最上の政策」というイギリスの諺は、適用に緩急の呼吸が要るな、と苦笑させられた。もう一人の兵隊はポケットから、折疊んだ袋を取り出して、拵げてみせた。寝袋だという。その辺の草を刈って詰め込めば寢床になる。これ一つあれば何処でも野宿ができる、と言う。寝袋というのは私には初見参であった。夏はそれでもよからうが、冬は困るだろう、と言うと、相手は怪訝な顔付きになり、「冬だって平気さ」と威張った。

ある日はチョット物騒な客があった。下士官らしいのが、少年兵を一人連れて現われた。いきなり土足で上り込もうとしたので、今迄にも何度も前例はあったのに、その日は虫の居処の加減か、私は見咎めて「靴を脱げ」とキメつけた。一つ間違うとこちらがドカンと一撃を喰ったかもしれないが、幸い相手はおっとり

していた。靴を脱いだところを見ると、靴下をはいていない。繻帯切れを巻きつけているだけである。それも風色に汚れていた。あるいはそれがロシア兵の正規のやり方であったのかも知れないが、私の直感したのは彼等の貧しさであった。この下士官は腕時計がほしと言った。私はすでにあちこちで同様の事件があったのを聞き知っていて、あるだけの時計類をベチカの灰の中へ、ほうり込んでおいた。

「時計なんかあるもんか。ウツだと思うなら家探してもなんでもするがいい」と日本語で怒鳴ると、相手は矢庭に自動小銃を肩からはずして、筒先を私の胸元に突き付けてきた。銃口を真近に、正面から見たのは、この時が初めてのような気がした。引金を引かれたら一溜りもない。いい気持はしなかったが、私は妙に意地になった。撃てるものなら撃ってみろ、と両手を拵げた。相手は気の弱い男だったと見えて、今度は腰に吊った牛旁剣の鞘を払って、私の胸元に差しつけて来た。その時フト気が付くと、彼のうしろに立っている少年兵の脚が、ガタガタ震えていた。

「ないものはないんだ。探すなら勝手に探せ」私は再び語気を強めた。二人は家探しを始めたが、ベチカ

の灰の中までは気が廻らなかつた。結局彼等はスゴスゴと引退つた。私はヘタヘタと坐りこんだ。今ならともあんな真似はできそうもない。

そのうちに私は大連にある関東州庁という役所へ、「業務連絡」のため出張することになった。勿論往復共歩きである。学生三、四名が「護衛」に付いて、出発した。どんな用件であつたかはもう記憶にないが、州庁学務課長のFさんの豪快廉直な人柄は今も懐しい。兎に角用務を果して、翌々日私は旅順に戻つた。ところが自分の家がなくなつていたのである。二時間の期限付きで、ソ連兵に追い立てられたといふのである。「ボクの家何処」と尋ねて歩く経験は、あとにも先にもこれが初めの最後であつた。家族は大学の図書館主任の家に、取敢えず身を寄せていた。それから数日後、元の家のそばを通りかかると、どうも様子がおかしい。思い切つて踏み込んでみると、藻抜けのカラであつた。私の家は比較的新しく日本人が建てたもので、ロシア人が明治時代に建てた石造りの家に比べると、遙かに安普請であつたから、乗取つてみたものの、畳敷きではあるし、住み心地が良くなかつたのであろう。残り物のうち、目星しいものは皆持ち去つて

いたが、刺身皿だの茶碗蒸茶碗だの、純日本風の瀬戸物は残つていて、文化の違いを感じさせられた。私の職業用の図書なども、そのまま手付かず書棚に並んでいたが、面白かつたのは、風呂の焚き口に掛軸が引裂かれて転がつていたことである。掛軸は焚き付けにもなるのだつたと思ひ知つた。トイレには「広辞苑」が持つて行つてあつた。モノは使いようである。

平常時には思ひもかけないような、事件や現象が、毎日のように起る中で、十月の初めになつて、愈々旅順在住の日本人は全員大連に移動することになつた。たしか三日がかりの大騒動であつた。私共は家族全員が手提袋や、フトン袋を仕立て直したリュックサックなどに、当面必要と思われる品々を詰めこんで、旅順駅まで行つた。応召の時と違つて、駅は持ち去れるものは悉く持ち去られたあとで、ガラソとしていた。乗り込んだ客車も、シートの布類はすべて剥ぎ取られた、無残な姿であつた。沿道ではすでに日本の兵隊達が、畑仕事などの労役に服していた。車窓からは別れや激励のことはが叫ばれ、「慰問」の品々が投げられ、哀しい交歓風景が続いた。

これが私にとって、昭和八年四月以来の旅順生活の

幕切れであつた。大連での抑留生活の数年間が、これに続くことになる。

(二九九一・一一・六)